



TITLE:

京大広報 No. 653

AUTHOR(S):

京都大学総務部広報課

CITATION:

京都大学総務部広報課. 京大広報 No. 653. 京大広報 2010, 653: 3085-3112

ISSUE DATE:

2010-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196431>

RIGHT:



京大広報

No. 653

2010.2



総長主催「外国人研究者との交歓会」
—関連記事 本文3094ページ—

目次

全学共通教育へのなお一層のご支援を お願いします 副理事・高等教育研究開発推進機構長 山本 行男……3086	
〈大学の動き〉	
松本 紘総長が濱田純一東京大学総長と対談 ……3088	
総長主催「外国人研究者との交歓会」を開催 ……3094	
博士学位授与式を挙行……3095	
平成22年度入学者選抜学力試験 (個別学力検査)の志願状況……3096	
平成21年度定年退職等予定教員……3097	
平成22年度概算要求内示概要……3099	
〈部局の動き〉	
宇治地区新年互礼会を開催……3100	
〈寸言〉	
我が人生—還暦を迎えて— 河野 良雄……3101	
〈随想〉	
大学院生命科学研究科設置に携わって 名誉教授 大山 莞爾……3102	

〈洛書〉	
かわいい子には旅をさせよ 河上志貴子……3103	
〈栄誉〉	
中西重忠名誉教授、深谷賢治理学研究科教授が 日本学士院会員に選ばれる……3104	
〈話題〉	
ノーベル賞授賞式に出席して……3105	
松本 紘総長が第5回京都大学東南アジア フォーラムに出席……3106	
第1回京大病院iPS細胞・再生医学研究会を 開催……3107	
経営管理大学院が神戸大学および慶應義塾大学 のビジネススクールと連携……3107	
マラヤ大学にて海外拠点オープニングセレモニー を開催……3108	
JSPS-VCC コーディネーター会議を開催……3109	
ソウル大学校代表団が桂キャンパスを訪問 ……3109	
〈訃報〉……3110	
〈グローバルCOEプログラム紹介〉	
生物の多様性と進化研究のための拠点形成 —ゲノムから生態系まで—……3111	

京都大学総務部広報課

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

全学共通教育へのなお一層のご支援をお願いします

副理事・高等教育研究開発推進機構長 山本 行男

平成21年4月1日付けで副理事・高等教育研究開発推進機構長に就任しました。京都大学化学研究所から旧教養部に助教授として着任したのは昭和62年のことでした。それ以来20数年間、数度の組織改編と移籍を経験しましたが、一貫して京都大学の全学共通教育(化学)に携わって参りました。



京都大学の教養教育システムの特徴は「くさび形」にあります。すなわち、入学当初の大学教育のはじめでは教養教育を大きく、回生が上がるにつれて小さくするというシステムです。「学生個々人が高度な学術文化との関わりにおいて自己をとらえ、真理を探究し、より深く知ろうとする心情を個々人の奥深くに醸成することを通して、高い人間性を育むこと」と謳われている京都大学の教養教育の理念の実現に相応しい編成と考えられます。全学共通教育は学術的教養(学生個々人が学問と向き合うことを通して、高い自立性、優れた価値基準、豊かな人間性を獲得すること)、文化的言語力(グローバル社会における指導的活躍の基盤となる異文化理解と外国語運用力の獲得)、基礎的知力(学術研究の専門家として、また社会における指導的活動の強固な基礎となる幅広い基礎知識・技術・技能の獲得)を三つの柱にしてその涵養を目指します。この学術的教養で述べられている教養をもって教養教育と理解される場合がありますが、全学共通教育全体が目指すところの教養教育とは、三つの柱の総体である広い意味での教養教育です。

高等教育研究開発推進機構は、これらの目的を達成するため、以下の事柄を中心として全学的な立場から全学共通教育の企画・運営にあたっています。

○活力ある教育の場の形成

学生一人ひとりが高い学術的教養を獲得することは、単に与えられた授業科目の履修のみでは実現されません。また「自由の学風」に根ざした教育は必然的に学生個々人の学術研究、勉学への強い興味、意欲を前提としていますが、自主的な勉学意欲が常にすべての学生に自然に備わっているわけではありません。このため、自覚的な学習を引き出す活力ある教育の場を形成し、同時に学生・教員の対話の促進に努めています。

○豊かな言語力の育成

国際語としての英語の十分な運用力を育成することは喫緊の課題ですが、これは限られた授業時間のみで達成されるものではありません。学生の日常的な自学・自習を促進する教育内容の改善が必要です。また、国際的な場で活躍できる人材の育成のためには、異なる言語、異文化への障壁を除去し、文化的言語力の育成が必要です。英語学習の近代化とともに、多様な初修外国語学習の強化に努めています。

○幅広い基礎教育の充実

理系、文系のそれぞれに関連する学術の基礎を幅広く修得すると同時に、理系学生の人文・社会分野の基盤的知識、文系学生の理系の素養の強化は、教養教育の重要な部分です。また、変化する学生の状況に適応した基礎教育の強化が必要です。このために学術諸分野の基礎としての伝統的な共通基礎教育の強化に努めています。

約1600人の教員と約9000人の履修者が関わる延約2800コマの授業から構成される全学共通教育全体を体系的に運営するため、科目を学問の領域に基づいて、人文科学および社会科学系科目(A群)、自然科学系科目(B群)、外国語科目(C群)、保健体育科

目(D群)に分類します。それと同時に、教育の目標から教養科目と基礎科目に、さらに対象履修生から全学向け、文系向け、理系向けに分類します。機構においては、全学からの学部委員等から構成される全学共通教育システム委員会が、それらを統括して全学共通教育全般に関する事項を審議しています。現在、単位の実質化等の教育の質保証が重視され、「学士課程教育の構築」が強く求められています。システム委員会は、その観点から大学設置基準に合致する授業回数を確保できるように、全学共通教育について平成22年度から始まる学年暦を策定しました。また、教養教育専門委員会、基礎教育専門委員会、外国語教育専門委員会、情報教育専門委員会とそれらの下に多くの科目部会が組織され、個々の科目とカリキュラムを審議しています。今年度は全学の標準シラバスが制定され、平成22年度にはそれに合致する全学共通教育科目シラバスを履修生に提示できるよう鋭意努めています。また、新入生が高等学校から大学へ戸惑いなく移行できるよう、そして大学での勉学と社会的な経験を円滑に始められるよう、いわゆる初年次教育の取り組みを始めています。さらに「京都大学次世代地球社会リーダー育成プログラム(K.U.PROFILE)」の留学生の1回生教育を整えるよう受け入れ準備を急ピッチで行っています。

高等教育研究開発推進機構は、全学共通教育科目の実施主体ではありません。実施責任部局である人間・環境学研究科と理学研究科(自然科学系科目)が授業提供を主に行っています。さらに、それ以外の研究科、研究所やセンターが実施協力部局として、それを補って科目を提供して全学共通教育は成り立っています。機構は先に記した委員会群における審議に加え、その企画と運営を行います。高等教育研究開発推進機構に所属する常勤教員である兼任の機構長・副機構長が教養教育の改善の責務を負っているのですが、この多数の授業の日常的運営・調整については、教育推進部に属する事務スタッフの努

力によってその責務が果たされているのが実態です。高等教育研究開発推進センターの教員の支援を受けてはいますが、将来への展望を見据えた全学共通教育の改善については、その広範な取り組みに完全には対応しきれていなかったことは否めない事実です。

この間、機構あるいはセンターには数名の重点施策定員教員、さらに、特定外国語担当教員が着任しましたが、それは実施責任部局における全学共通科目担当教員の減少を補う意味が強いものでした。平成22年度、機構は新たに4名の重点施策定員の措置を受け、その組織強化を図り全学共通教育の一層の改革に向かうことになりました。不足する科目担当はなお多く存在しますので、その緊急性を勘案しながら、この貴重なポストを機構の取り組みの機動力向上に資するよう配置して、力強い教員組織を作り上げる所存です。また、センターの全学共通教育カリキュラム企画開発部門(第2部門)と情報メディア教育開発部門(第3部門)は機構の高等教育研究開発推進部にあたり、その活動を支援するのが現状の体制ですが、これをより直接的な関係に改め、京都大学の教養教育の改善に向かうことを計画しています。

全学共通教育の運営と改善には全学的な意思の統一と京都大学全部局の全面的な協力が不可欠です。皆さまの一層のお力添えをいただきますよう、よろしくお願いいたします。



生物学実習：ムラサキオモト表皮細胞の原形質分離を顕微鏡で観察

大学の動き

松本 紘総長が濱田純一東京大学総長と対談

平成21年12月9日に株式会社文藝春秋の企画により、松本 紘京都大学総長と濱田純一東京大学総長が対談されましたので、その対談の概要を掲載いたします。本稿の作成にあたり、同社のご厚意により対談の草稿を提供いただきました。

なお、同社の記事は、『文藝春秋』平成22年2月号に掲載されております。

松本 濱田先生とじっくり話すのは今日が初めてで、楽しみにして来ました。平成21年4月に東大の総長に就任されたときもお会いしましたが、なかなかゆっくり話ができないので、



松本京大総長

今日は関西人同士色々な話をしたいと思っています。

濱田 東大と京大の総長は、いつもコミュニケーションをしっかりとっておく必要がありますね。東の東大、西の京大とよく言われるように、歴史を振り返っても研究実績の面でも人材育成の面でも、両校が果たしてきた役割は、非常に大きかったと思います。

【人材育成について】

松本 東大は明治の時代に日本を作ろうということで最初に創立され、優秀な官吏や産業界の優秀なリーダーを出してこられた。この役割は絶大だったと思います。彼らが日本の社会を設計して引っ張ってくれました。これは間違いないです。

京大は30年後に設置されたのですが、今度は研究を主にするような大学を西に作ろうということで作られたらしいのです。

京大はどちらかというと違うことをアンチテーゼとして出すという風潮が、特に文科系であったと思うのです。だから、自分で考えて、こうしたほうがいいのかという、やや醒めた目で見えるような人が京大の中にはいると思います。そういう人がいるということは京大の一つの風潮だと思います。

濱田 東大という組織で見ると、伝統的な分野を守りつつも、新しい課題への動きも速いですね。たとえば環境問題とか高齢社会の問題だとか、そういう新しい問題が出てきて、今までの学部とか専

門分野にとらわれない研究、あるいは教育というのがずいぶん増えてきています。

それから教育も丁寧になってきている。今までは研究のついでに教育をやっているとい

う感じもありましたが、今は本当に教育そのものに力を入れて研修や教科書作りもやっています。

一方で、次の時代を作っていくという一種の荒っぽさとか熱気とかそういうものが相対的に薄れています。やはりある水準になって、豊かさというものが大学の中にもできてきているのでしょうね。水準としては確かに良くなり続けているのだけれども、何か爆発的に変えていこうという荒っぽさが今は少ないですね。

松本 今先生がおっしゃったような点は京大でも感じます。メンタルには、自分の思いでこの研究をやるんだとか、教育も俺流のやり方でやってどこが悪い、というようなところがまだ一部残っています。

濱田 それはやっぱり京大のいいところなのです。

松本 京大は政治家や行政官になりたい人は少ないですね。野に出て、固有の特性で頑張りたいと考える人が多いようです。この間びっくりしましたが、京大出身の中小企業の社長はすごく多いですね。千人以上おられる。自分の世界を作りたいと考えている人が多いようです。

大企業でも頑張っておられる人はもちろんいますが、社会のレールに乗って行こうというよりも、京大で何か変わった先生のところでいろんなことを勉強してみて、自分でもがいてみるけれども、まあしかし保証はされていると考えるような人が集まったのではないですか。



濱田東大総長

濱田 ああ、そうですか。

松本 今は、レールの上に乗らないと大学に入れないという制度になっています。可否を決めるために差が付くような難しい問題を作ろうという傾向になるのですね。そうすると予備校とか高校はそれに合わせてくるのですね、本当にびっくりするくらい対応が早いですよ。しかも難しい大学に行こうと思ったら、幼稚園の頃からずーっと塾に入れるのですね。

濱田 一種のパターンにはめていっているのでしょうね。あるパターンに入れば非常にスムーズに最終的に大学まで行けるけれども、外れて生きるということは大変難しい時代だし、それに慣らされている学生が来ているから、よけい冒険主義といえますか、チャレンジをしてあえて逸脱してということとは難しいですね。

松本 同じことを感じますね。要するに落ちこぼれというのが怖いのです。いつもセーフで来た学生はそういう意味ではチャレンジ精神を失うようなレールが敷かれているのです。授業でも最近の学生を見ると、きちっとおとなしく聞いています。

濱田 私たちの頃は荒っぽい人もいれば、おとなしい人もいて、そういう振れ幅の大きい時代のほうが多様性があったかもしれませんね。ところが、今は流れに乗らないといけないという強迫観念もあるし、一種の価値序列みたいなものができているから、それでよけい学生は苦しいのかもしれません。

だから、私は今、タフな東大生を作ろうと言っているのです。そのために、一つは目標を持つということをしちんと指導することと、キャリアというのは単線的ではなく、いろんな線があって序列化もされていないのだと。そういうのを見せる。

国際経験というのすごくいいと思っています。学部学生の段階でできれば1年くらい海外に行って単位を取ってこないとか卒業させないとかです。そこまでのいなくても、数カ月は行ってくるとか、サマースクールに行くとか。あるいはそれもしなければ、留学生と一緒にワイワイやる場を作るとか。

松本 私は入ってきた学生を1回リセットしてアンラーニングしたいと考えています。

要するにそんなレールに乗っかっているだけじゃだめですよと言いたい。大学院生がすごく増

えてきて、そうすると専門の競争が非常に激しくなっていて、専門を目指して猛烈に走らないといけません。能力に余裕のある学生は別にして、今能力が目一杯という学生がいます。そういう学生にしてみたら一生懸命そこに向かって走らないと、いろんなことを勉強して幅広くやっ払いこうとすると落ちこぼれます。落ちこぼれはひどく怖いですから、とにかく与えられた道を、わりあい限られた道を走るという傾向があるのです。それをリセットしてアンラーニングするということは大変重要だと思っています。

社会は大学生の数を増やして、知識を教え込んで、トレーニングしてくれと言いますが、大学というのはやっぱり自分で考えさせるというのが基本です。個性を伸ばすためには幅広い勉強をして、それでも受け入れるという態勢がないと学生はチャレンジしません。

社会全体のシステムの中の大学の役割ということを見直す必要があると思っています。ある程度の知的レベルは持ってほしい。専門も持ってほしい。かつリベラルアーツも勉強してほしい。私たちは欲張ったことを言っているわけです。それがわれわれに課せられた義務だと思っています。

ところが、京大は残念ながら教養部をなくしたのですよ。東大は残しましたね。あれは正解だったと思います。

濱田 当時迷ったと思いますけど。本当によく残したと思います。

松本 京大はそういう意味で今再構築を図っています。リベラルアーツというか、教養教育というか、全人教育というか、そういうものを身につけさせるようにしたいと思っています。

【入学試験制度について】

松本 社会全体の流れを見ていると、大学入試が及ぼしている影響の大きさを考えると変える必要があります。短期ではできないと思いますが、国造りの形を考えて、教育の形を考えて、それで入試はどうあるべきかと。それにはあまり時間はないと思います。

濱田 時間がないというのはまったく同感ですね。もうここ5年くらいの間で動かしていけないと。設計だけでなく、実際に動かすところまでいえないといけなんでしょう。そのなかでも、特に

東大、京大あたりの役割は大きいと思います。

入試制度については、東大では検討グループを作って検討しています。

松本 京大では入学試験制度はどうあるべきかという検討を始めて、検討グループを作るよう担当理事も一緒にやっています。

今の初等教育を見ていると、ターゲットは大学に合格することですからね。入試科目に限定して勉強するのです。そうするとね、でき上がった子というのは非常に偏った知識しかないのです。だから私は、大学で受け入れるとすれば、いろいろな勉強をしてきた生徒の努力を評価するというようなシステムにしないといけないと思います。それをまったく今は見てなくて、一発勝負のセンター試験、入学試験だけで評価するわけです。そうじゃなくて、人間ですから長い間成長してきているはずなのです。その成長過程の努力の跡というのをいかに評価に取り込むかという課題はあるだろうと思っています。

濱田 私は一種のリスク覚悟で受け入れるようなシステムというのがあるのもいいと思います。学生側にも卒業できるかできないかというリスクを負ってもら。



東大、京大の場合は非常にいい教育環境があるわけですから、それをしっかり使わないで落ちこぼれるのは自己責任だというメッセージを大学側からも出すべきだと思うし、その上での入学試験であり、教育システムであるということだと思います。

先程言ったタフな東大生を作るということでは、特にコミュニケーション力、それから行動力、タフさと多様さというのを両方結び付けるのがすごく大事じゃないかと思っています。つまり、タフさというのも多様であっていい。一人でじっくり1ページの文献に1週間かけるとか1カ月かけるとか、それもタフさなのです。

ただ、やはり自分の力を鍛えるというのは、一人では鍛えられない、これは間違いない。だから、コミュニケーション力というのはタフさのベース

だし、それから本を読むということも含めて広い意味での行動力というのはやっぱり大切です。コミュニケーション力、行動力というのは、あんまり狭く解釈されると限られた特定の人のパターンになりますが、そうではなくて、そこにいろんな行動力、いろんなコミュニケーション力が含まれているのだ、というふうに理解していけば、結構多様な幅の学生がそこに入ってくるというふうに思っています。

松本 私が思うに何が重要かというと、人の痛み、人のいいところを感じられる人です。つまり、相手の立場とか、この場面にいない人たちのことも常に考えているというような、他人を中心にものを考えられる人、これが本当のコミュニケーション力だと思うのです。たとえば企業ですと、利益を上げないといけないというけれども、利益を上げるとどうなるのか、わが社が伸びたらこれで社会はどう変わるのか、ということまで直観で考えられる人が必要となります。そのためには多様な経験と多様な本を読んでいないと分からないですね。そういった意味の多様性を持った人が私は学生では素晴らしいと思います。

もう一つは、頭の回転が早いというか、知識がたくさんある学生です。学生ですから熟成はしていないと思いますが、いろんなことを話したら、あっ、ここはちょっと勉強したことがある、読んだことがある、というふうに反応できるような能力、こういうものを持ったのが理想の学生だと思っています。関心を持ったことがある、一度は見たことがある、という引出しの多い学生が伸びると思っています。つまり、一つの事柄をするのには、知識を総動員するわけですが、人の関係も総動員するわけです。人から教えてもらうことは常時あるわけです。その二つがあればぐっと伸びると思っています。裾野が広くないと上へは行けないですね。幅広いことに興味を持っていて、歴史、文化、現世の人間、現実社会の人間も含めて人間というものを見ることができると、感じられる人というのが、理想の学生ですね。

【大学の国際化について】

濱田 私がやりたいと思っているのはキャンパスを徹底的に国際化することです。国際化するというのはべつに日本のよさというのを捨てる、

あるいは日本語を捨てる、ということではなく、それとのコンビネーションです。

伝統的な日本の学問はしっかり育ってきていますから、それとの効果的な組み合わせを考えながらの国際化であるべきです。しかし、そんなにもう時間はないと思っています。せいぜい改革は私の任期中ぐらいに目処をつけておかないと、世界との競争には勝てません。

松本 国際化については、京大は全然だめだと思っています。その理由は2, 3あるのですが、言語の問題だけではありません。言語も重要ですが、国際化マインドですね。自分の学問が世界の中でどういう位置づけにあるかということを考えることが、国際化の第一歩だと思っています。たとえば理工系だと国境がないですね。

濱田 なるほど、そうですね。

松本 医学もほとんどないです。そういう分野は、国際化といってもわりあい理解されやすい。でも、社会科学とか人文科学になりますと固有の文化と結びついていきますから、言語の占める割合が非常に大きい。あるいは制度の占める割合が大きいです。それは国によって違いますので、必ずしも国際化の中で同じ土俵で評価ができないという分野があります。これの国際化とは何ぞやということを議論してほしいと言っています。

英文学を日本でやる意味は何か、欧米で日本文学をやる意味は何か、という問題も絡んでくると思います。そういうところの国際化は何かということを検討していきたい。しかし、全体的にはまだ意識は低いと思います。だから、世界の中で自分の研究の位置づけ、あるいは意義づけということを認識すれば、同じ研究内容でもずいぶん違う発信ができると思うのです。そこのところはまだまだ低いと思っています。

学内でもやらねばならないことがいっぱいあります。京大では英語表記でない案内表示などがたくさんあります。英語、韓国語、中国語ぐらいは必要ですね。努力してだいぶ増えてきましたが。地図と番地の情報を多国語で提供するというのを、少なくとも学内ではやっていこうと思います。そういう小さなことから、実質的なところまでいろいろあると思います。

濱田 うちでもやらないといけません。

松本 中国の清華大学の学長に伺ったのですが、学



部に英語の教育が120コースあるらしいのです。

濱田 学部で120というのはすごいですね。

松本 英語でやると大変でしょうと質問したの

ですが、インセンティブを与えているということなんです。インセンティブとは給料ではなくて、清華大学ではティーチング・ロードを決めているということです。教育3分の1、研究2分の1、残り6分の1をサービスと、それをだいたい教員ごとに決めてあるということです。もし英語でやれば、教育3分の1のロードをその分だけ減らして、コマ数を少なくしていいということです。その分を研究に回してもいい、というようなインセンティブを与えている。

濱田 やっぱり何かインセンティブがないと無理ですね。日本語でやる教育で目一杯やっているはずですから、それに英語のロードを加えるとどこかを削らないといけなくなります。

【事業仕分けに対する評価について】

濱田 事業仕分けそのものは、あれは予算を考える一つの側面、一つの切り口で、それは必要だと思います。それから透明性を高めるというのはとても大事なことです。一方で、学問の本質論としては、やっぱり常に一歩先というのを目指さねばならないということと、継続性が大事だと思います。

それから私は教育や研究への投資で「ビジョン」が大事だとよく言っているのですが、今日投資して明日効果が出るというものであれば、これは極端に言えばビジョンはいらない。効果はすぐ見えますから。だけど、基礎研究というのは、ある程度タイムスパンがあつての効果ですから、あるビジョンを持って、効果はすぐには見えないけれども、だけどこれをやるのが正しいんだと、そういう夢と思い切りがないと投資の決断はできないと思います。ビジョンというのは先行することがとても大事です。ビジョンがしっかり示されていれば、ここしばらくは予算がきつから我慢してくれ、という理屈も通る可能性がある。だから、と

にかく削るという今回のやり方は、出し方が下手だったと思うのです。

それと同時に、あれは国立大学の役割というのをもう一回きちんと考え直すいいきっかけになったと思います。国際競争にさらされている中での国立大学のあり方というのを私たちのほうから見せていく、そういうことをやらなければならないと思っています。今までだいたいこちらの言いたいことを言ってきたので、今度はこういう大学像を作るべきだということを、次のステップでは積極的に言おうと思っています。

松本 科学技術、学術の世界とその他の項目をどう見るかという見方、長期のビジョンということはもちろん重要ですね。社会の進むべき方向に対するそれぞれの役割の判断を同列に扱って、同じように削りましょう、無駄があったら削りましょうという考え方はそもそも間違いであるということを私は申し上げたのです。

国家存亡に関わるとまで言ったのです。これは今先生がおっしゃったように、たぶん10年、20年でボディブローのように効いてきます。それをすぐには修復できないのです。5年開けば、5年間加速して追いつくことはできません。10年、15年かかります。その間に日本がちゃんとやっていくかということを考えないといけないですね。



たとえばグローバル COE についても、あんなものは広すぎてだめだという話がありましたが、若手研究者の雇用に使っているところが多いのです。だいたい若い人が5千人程いるのですが、そういう人たちの雇用している JSPS の特別研究員も廃止と出ましたね。そんな人の先行きを世の中は知らんと言いついていいのかと思います。

ちゃんと世間に対して言わないといけないのは、そんな人たちはすごい努力をしてきた人たちだということです。ずーっと積み上げて、こつこつ勉強して、一生懸命研究しようと研究所の中で夢を

抱いてやってきて、やっとドクターの学位もとって、これからというときに生計が成り立たなくなります。そうすると外国に行ったり、違う職業に就いたりして、ぽっかり人材の穴が空くのです。そのあとは、またずーっと教育しないとイケないのですぐには埋められません。その問題と他の事業、単年度予算に成果が出た小さな事業と同じにしてもらっては困るという思いが非常に強いのです。

日本の教育費の割合は、OECD の先進国の中でもすごく低い。これも恥ずかしい話だと思うのですが、日本は科学技術立国だと言っているわりには公的支援が少ないです。

濱田 日本がこれから小さい政府で行くのか、それとも大きな福祉国家型で行くのか迷って、フラフラしているところがあるので、その影響もあるのでしょうか。公的投資が少ないというのは、小さな国家を目指していれば、仕方ないところもある。だけど、一方で今ちょっと福祉国家的なところを目指そうというふうになってきていますから、そのふらつきが長引くと、この国の経済力なり、それこそ教育研究の力に対するダメージも非常に大きくなると思います。

松本 過渡期には必ずそういうことが起こると思うのですが、長引くと大変大きなダメージになると思います。科学技術立国日本は確かに新しい技術を次々出すし、そういう目で期待されていました。日本は学術と科学技術で尊敬される国を目指すべきだと思います。それも他の国より少しだけ頭を出していることが重要です。ところが少しだけ頭を出すためには、坂道を一生懸命研究者が日本の国力という大岩を押し上げなくてはなりません。緩んだらすぐに下がるのです。やめたら一気に下がりますよという意識があまりになさすぎます。

濱田 それは確かに実感です。

松本 やっぱり日本の作り出す新しい知見、知識、技術というものにみんな注目しているのです。それがぐっと下がれば、ますます日本は見向かれなくなるでしょう。そうすると、端的にいうと食料を買えない、資源を買えないとなり、産業界はまた落ちますよ。落ちたらもっとだめになっていきますよ。ネガティブ・スパイラルにすぐ落ちるのです。今まで一生懸命科学技術立国でやってきて、それを支えたのが大学であり、あるいは研究機関であったのです。

【東大からの京大論，京大からの東大論】

濱田 東大と京大というだけじゃなくて、もう少しいくつかの大学が加わってもいいと思うのですが、同じくらいの力を持った大学が特徴を出し合いつつ競い合う、そういう状態が望ましいと思っています。

実際に、東大がある部分のトップに出、そして京大が別の部分のトップに出ているところがあるので、結構そういう状況に近づいていると思うのですが、明確に日本の大学の全体像としてあっていいと思っています。そのときに、同じ特色を持った大学同士では仕方がないので、地の利の違いというのも大きいです。東大は東京にあって、世の中の動きを良くも悪くもうまく捉えて動いている。それに対して京大は少しクールな目でそういうものを見ている、じっくり考える時間もある。そういうスタイルを大事にしながら、両方のコンビネーションの力が日本全体の学問の力を引き上げていくのだろうと思っています。



松本 東大は他の大学から見て教員数も多いし、質も高い。質、量ともに高い、やはり日本一の大学だろうという評価は当然受けてしかるべき大学だろうと見ています。ただ、個々に見ると東大の人は、今言われたように、「不易流行」の流行の部分に敏感な人がやっぱり多くて、しかも、常にすべての点でトップでなければならないという意識を持った人が多い大学です。それはいいことだと思います。

京大はわが道を行く。その上で一番だけど、世間のことはまあちょっと、みたいな、そういう個性が強いですね。それぞれの個性があります。私は東大は今後も今の調子でやってほしいと期待していますし、しかし一方では、京大のようなちょっと変わった人が出てほしいという期待感

あります。

濱田 ぜひ、京大はそうあってほしいです。

松本 いろんなバラエティーの人が学長になれるような良識が東大にはある。京大はその点、理工系が中心で文科系は瀧川先生以来ないのではないですか。

その意味で東大はかなりバランス感覚がよい大学と見ています。今おっしゃったようなことだと思うのですが、理工系に振れば次は文科系、文科系に振れば今度は理工系と、うまくやられておられると思います。

京大は誰が総長になっても全体を見ないといけないので、学長になってから勉強する必要があります。私は今一生懸命文科系の勉強しているわけです。文科系の学生のことも理解しなければいけないですから。

濱田 いや、偉いですね。私も頑張らなければ。

松本 本当にもうちょっと若い時代からマネジメントというトレーニングをする必要があって、東大は私の見方ですと、非常にそこはよく考えておられる。大学運営についても、若手やいろんな人を育ててこられた。京大もそれを今後しようということで、かなり大きい執行部にしました。総長、理事が7人、副理事が11人、理事補が11人、それから総長室は11人でしたが、新しく39人に加わっていただき、未来の京大を考えるチームを作る予定です。

濱田 それは必要ですね。

松本 われわれには地の不利、地の利があります。不利は現政権から遠い、東京から遠い。利は過去の政権というか、都にずっといたし、その資産がある。私たちは長い間日本の文化の中心地であった京都にいて、学生の町京都にいて、いろんな意味で強いサポートを地域からも得ているし、そういう目で見られているという点を伸ばしていきたいと思います。今後も肩ひじ張らないコミュニケーションを続けていきたいですね。ぜひ今度は関西弁で色々話しましょう。

濱田 確かに私も関西弁で話しているときの方が頭が柔らかくなっているように感じます。松本総長のこれからのご活躍を楽しみにしております。今日はどうもありがとうございました。

松本 ありがとうございました。

総長主催「外国人研究者との交歓会」を開催

平成21年12月22日(火)、百周年時計台記念館国際交流ホールにおいて、総長主催「外国人研究者との交歓会」を開催した。これは年末の国際交流恒例イベントとして、平成12年から開催されており、京都大学で教育・研究に携わっている外国人研究者と、総長、理事等をはじめ部局長や外国人研究者と関わりのある本学教職員との間の交流を深めることを目的としている。

今回の参加者は、外国人研究者・日本人教員等合わせて約280名。研究科・研究所・センター等合わせて30を超える部局から参加があった他、アメリカ、インドネシアの両総領事館より、それぞれ副領事の参加を得た。



松本総長による開会の挨拶

交歓会は、森 純一国際交流推進機構長の司会・進行によって開始された。参加者同士での歓談の後、

松本 紘総長の開会挨拶では、今年の京都大学での研究や国際交流に関する重要事項に触れながら、松本総長によるアットホームな歓迎スピー



乾杯の発声をする吉川理事

チに、会場はより和やかな雰囲気にも包まれた。続いて吉川 潔理事・副学長により乾杯の発声があり、外国人研究者や受け入れ教員が互いの研究内容などをテーマに懇談が盛り上がり、通常ではあまり接することのない異分野の研究者同士が一つの空間で親交を深めるという場面が見受けられ、参加者からも好評であった。また、食事メニューでは、イスラム圏の方に配慮したハラールメニューなどが揃い、より一層歓談を盛り上げた。

約2時間の交歓会は、森機構長の挨拶により締めくくられ、パーティの余韻を残しつつ、閉会となった。

なお、本学での教育・研究の一助として、国際交流サービスオフィスから、刊行されたばかりの『外国人研究者受入れハンドブック』が会場出口で参加者に配付された。

(国際部)

博士学位授与式を挙行

1月25日(月)午前10時30分から、百周年時計台記念館において、松本 紘総長、理事・副学長をはじめ、各研究科長・学舎長、副理事出席のもと、博士学位授与式が挙行された。

総長から、各授与者に対し学位記(平成21年11月24日付、同22年1月25日付)が手渡された後、総長の式辞があり、午前11時25分に終了した。

各分野別内訳は次のとおりである。総長式辞は総長室ホームページに掲載している。

http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/profile/intro/president25/speech/100125_1.htm



総長による学位記の授与



平成21年11月24日付 博士学位授与者



平成22年1月25日付 博士学位授与者

学 位	平成21年11月			平成22年1月		
	課程博士	論文博士	計	課程博士	論文博士	計
博士(文学)	7	1	8	4	2	6
博士(教育学)	—	1	1	1	—	1
博士(法学)	—	—	—	—	—	—
博士(経済学)	—	3	3	1	1	2
博士(理学)	5	—	5	1	—	1
博士(医学)	5	1	6	9	5	14
博士(医科学)	2	—	2	1	—	1
博士(社会健康医学)	1	—	1	2	—	2
博士(薬学)	—	—	—	—	2	2
博士(工学)	7	—	7	7	2	9
博士(農学)	—	4	4	2	2	4
博士(人間・環境学)	1	1	2	2	1	3
博士(エネルギー科学)	1	—	1	—	2	2
博士(地域研究)	—	—	—	—	—	—
博士(情報学)	3	—	3	3	—	3
博士(生命科学)	1	—	1	—	—	—
博士(地球環境学)	—	—	—	—	—	—
計	33	11	44	33	17	50

(教育推進部)

平成22年度入学者選抜学力試験(個別学力検査)の志願状況

2月25日(木)から27日(土)に実施される平成22年度入学者選抜学力試験の志願状況は以下のとおりです。
志願票の受付は、1月25日(月)から2月3日(水)まで、各学部で行われました。

学 部			募集人員	志願者数	倍 率	(参考) 前 年 度 最 終			
						募集人員	志願者数	倍 率	
総 合 人 間 学 部	前	期	120 [△]	579 [△]	4.8	120 [△]	537 [△]	4.5	
		文 系	65	340	5.2	65	330	5.1	
		理 系	55	239	4.3	55	207	3.8	
文 学 部	前	期	220	738	3.4	220	561	2.6	
教 育 学 部	前	期	60	232	3.9	60	225	3.8	
		文 系	50	191	3.8	50	189	3.8	
		理 系	10	41	4.1	10	36	3.6	
法 学 部	前	期	320	876	2.7	320	812	2.5	
経 済 学 部	前	期	230	802	3.5	230	805	3.5	
		一 般	180	575	3.2	180	583	3.2	
		論 文	25	117	4.7	25	112	4.5	
		理 系	25	110	4.4	25	110	4.4	
理 学 部	前	期	311	892	2.9	311	1003	3.2	
医 学 部	前	期	250	605	2.4	248	590	2.4	
	医 学 科	前	期	107	303	2.8	105	306	2.9
	人間健康科学科	前	期	143	302	2.1	143	284	2.0
	看 護 学 専 攻	前	期	70	143	2.0	70	115	1.6
	検査技術科学専攻	前	期	37	81	2.2	37	85	2.3
	理学療法学専攻	前	期	18	37	2.1	18	34	1.9
	作業療法学専攻	前	期	18	41	2.3	18	50	2.8
薬 学 部	前	期	80	213	2.7	80	244	3.1	
	薬 科 学 科	前	期	50	124	2.5	50	122	2.4
	薬 学 科	前	期	30	89	3.0	30	122	4.1
工 学 部	前	期	955	2507	2.6	955	2388	2.5	
	地 球 工 学 科	前	期	185	485	2.6	185	393	2.1
	建 築 学 科	前	期	80	229	2.9	80	253	3.2
	物 理 工 学 科	前	期	235	572	2.4	235	592	2.5
	電気電子工学科	前	期	130	381	2.9	130	281	2.2
	情 報 学 科	前	期	90	221	2.5	90	224	2.5
	工 業 化 学 科	前	期	235	619	2.6	235	645	2.7
農 学 部	前	期	300	876	2.9	300	826	2.8	
合 計			2846	8320	2.9	2844	7991	2.8	

(注) 法学部と経済学部(一般)の募集人員は、外国学校出身者のための選考各10名以内を除く。

(学生部)

平成21年度定年退職等予定教員

京都大学定年規程等により、次の教員(教授53人、准教授5人、講師1人、助教5人)が、本年3月31日付けで退職の予定です。

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
文 学 研 究 科	御 牧 克 己	文献文化学専攻 東洋古典学講座	インド・チベット仏教学並びにチベット・ボン教思想研究
〃	中 務 哲 郎	文献文化学専攻 西洋古典学講座	ヘロドトス、喜劇を中心とするギリシア文学研究 古代説話研究
〃	齊 藤 泰 弘	文献文化学専攻 欧米語学・欧米文学講座	レオナルド・ダ・ヴィンチの手稿と思想研究 ゴルドーニの演劇研究 イタリア演劇史の研究
〃	濱 田 正 美	歴史文化学専攻 東洋史学講座	中央アジアの宗教と文化に関する文献歴史学的研究
〃	苧 阪 直 行	行動文化学専攻 心理学講座	意識とワーキングメモリの実験心理学的及び認知脳科学的研究
〃	紀 平 英 作	現代文化学専攻 現代文化学講座	20世紀アメリカ政治社会史に関する研究
経 済 学 研 究 科	八 木 紀 一 郎	経済学専攻 経済理論講座	制度の政治経済学、近代日本の経済学、オーストリア学派およびマルクス経済学に関する研究
〃	森 棟 公 夫	経済学専攻 統計・情報分析講座	計量経済学、特に、同時方程式、時系列分析に関する理論的な研究
理 学 研 究 科	今 井 憲 一	物理学・宇宙物理学専攻 核物理学講座	原子核及びハドロン物理学の研究
〃	北 村 雅 夫	地球惑星科学専攻 地球物質科学講座	造岩鉱物の構造と組織形成に関する研究
〃	花 田 禎 一	化学専攻 無機化学講座	無機非晶質固体材料の合成および構造・特性評価に関する研究
医 学 研 究 科	鍋 島 陽 一	医学専攻 腫瘍生物学講座	動物個体の形成と機能維持の分子機構に関する研究
〃	真 鍋 俊 明	医学専攻 基礎病態学講座	肺に関する凍結切断による微細構造の研究と病理組織診断に関するアルゴリズムの研究
〃	松 森 昭	医学専攻 内科学講座	心筋症、心筋炎および心不全に関する基礎的ならびに臨床的研究
医学部附属病院	乾 賢 一	薬剤部	医療薬理学、薬物動態学に関する研究
〃	中 嶋 安 彬	病理診断部	人体病理学及び病理診断学に関する研究、特に骨・軟部腫瘍、中枢神経腫瘍の臨床病理学的研究
薬 学 研 究 科	半 田 哲 郎	創薬科学専攻 薬品製剤設計学講座	リボタンパク質の構造と機能に関わる生体界面化学的研究
工 学 研 究 科	青 木 謙 治	都市環境工学専攻 地殻環境工学講座	岩盤工学とくに、エネルギー地下貯蔵システムに関する研究
〃	森 澤 眞 輔	都市環境工学専攻 環境デザイン工学講座	環境微量汚染物質による健康リスクの管理および環境システムのデザインに関する工学的研究
〃	高 橋 康 夫	建築学専攻 建築史学講座	日本都市・建築史の研究
〃	木 田 重 雄	機械理工学専攻 流体理工学講座	流体物理学(乱流力学、乱流混合、層流乱流遷移、流れの安定性、渦力学、MHDダイナモ、等)の研究
〃	市 川 朗	航空宇宙工学専攻 航空宇宙システム工学講座	宇宙機の相対軌道および姿勢運動の制御に関する研究
〃	大 澤 靖 治	電気工学専攻 電気システム論講座	電力システムの解析と制御に関する研究
〃	大 寫 幸 一 郎	材料化学専攻 有機材料化学講座	有機反応化学に関する研究
〃	檜 山 爲 次 郎	材料化学専攻 有機材料化学講座	高選択的有機合成反応の創出と高機能有機材料の創製に関する研究
〃	榑 茂 好	分子工学専攻 分子理論化学講座	理論化学・計算化学に関する研究 無機量子化学に関する研究 反応理論化学に関する研究
〃	川 崎 昌 博	分子工学専攻 応用反応化学講座	化学反応動力学の基礎と、その応用としての分光計測法開発と大気環境化学に関する研究
〃	森 谷 公 一	原子核工学専攻 核エネルギー工学講座	1. 核融合炉ブランケット材料の照射欠陥に関する研究 2. アクチニド元素の高温化学
農 学 研 究 科	谷 坂 隆 俊	農学専攻 作物科学講座	主要作物における有用遺伝子の探索と機能解析および転移因子によるゲノム多様化機構の解明に関する研究
〃	山 内 龍 男	森林科学専攻 生物材料工学講座	紙の構造と物性を中心にパルプ繊維とそのリサイクル使用、更には機能紙や和紙との関連に至る紙材料科学研究

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
人間・環境学科 研 究	福 岡 和 子	共生人間学専攻 思想文化論講座	19世紀アメリカ小説、および批評理論についての研究
〃	西 井 正 弘	共生文明学専攻 現代文明論講座	人権条約・環境条約の遵守制度及び国際テロを含む安全保障に関する国際法的研究
〃	三 原 弟 平	共生文明学専攻 比較文明論講座	フランツ・カフカとヴァルター・ベンヤミンに関する研究
〃	堀 智 孝	相関環境学専攻 自然環境動態論講座	リン酸に関する分析化学・構造化学・地球化学研究
アジア・アフリカ 地域研究研究科	平 松 幸 三	東南アジア地域研究専攻 生態環境論講座	騒音の影響・評価に関する研究、日本・タイ・ラオスにおける音響生態学研究
〃	市 川 光 雄	アフリカ地域研究専攻 地域動態論講座	熱帯アフリカにおける自然と人の相互関係とその動態に関する研究
情報学研究科	宗 像 豊 哲	数理工学専攻 数理物理学講座	物理統計学の基礎と応用に関する研究
〃	片 井 修	システム科学専攻 人間機械共生系講座	自然システムと人工システムの共生の実現と互いの存在を深めるケアリング・コミュニケーションに関する研究
〃	熊 本 博 光	システム科学専攻 人間機械共生系講座	安全系を必要とするようなハイリスクシステムにおける人間と機械の相互作用の設計と分析と評価に関する研究
生命科学研究科	山 本 憲 二	統合生命科学専攻 応用生物機構学講座	微生物における糖および糖鎖の代謝系に関する基礎研究とその応用研究
経営管理研究部	大 本 俊 彦	経営管理講座	国内外の商業紛争の解決手法の比較検討、商業紛争予防の手法研究、その他契約・紛争解決に関する研究
化学研究所	磯 田 正 二	附属先端ビームナノ科学センター	有機集積構造及び構造形成過程の顕微鏡学的研究
〃	平 井 諒 子	環境物質化学研究系	天然高分子の構造および構造制御に関する研究
人文科学研究所	田 中 淡	文化表象研究部門	中国建築史、造園史、生活科学技術史に関する研究
生存圏研究所	今 村 祐 嗣	生存圏開発創成研究系	木材の劣化現象の解析と木質材料・住宅の高耐久化と長寿命化技術の開発に関する研究
〃	橋 本 弘 藏	生存圏開発創成研究系	磁気圏プラズマ波動および宇宙太陽発電所に関する研究
防災研究所	川 崎 一 朗	附属地震予知研究センター	測地－地震周期帯の地球ダイナミクスの研究
〃	関 口 秀 雄	附属流域災害研究センター	漂砂流砂系における堆積物動態と地形変化災害に関する研究
〃	諏 訪 浩	地盤災害研究部門	山地災害と、地すべり・斜面崩壊・土石流に関する研究
〃	柳 谷 俊	附属地震予知研究センター	地震に関連する地殻・岩盤の物性に関する研究
〃	大 谷 文 夫	附属地震予知研究センター	地殻変動観測による主として西南日本の地殻活動と地震予知に関する研究
ウイルス研究所	淀 井 淳 司	生体応答学研究部門	成人T細胞白血病・免疫アレルギー疾患の発症機構・レドックスシグナル制御に関する研究
経済研究所	西 村 和 雄	附属複雑系経済研究センター	非線形動学を用い、経済における複雑現象や、経済主体の行動をも学際的に分析する複雑系経済学の研究
数理解析研究所	柏 原 正 樹	基礎数理解析部門	代数解析学に関する研究
〃	高 橋 陽一郎	無限解析研究部門	確率解析および力学系、とくに統計力学に関連する諸問題の研究
原子炉実験所	代 谷 誠 治	原子力基礎工学研究部門	原子炉物理学に関する研究、特に臨界集合体を用いた原子炉核特性の測定及び解析を中心とする実験的研究
〃	山 本 修 二	原子力基礎工学研究部門	中性子断面積の測定精度向上を目指した測定技術の開発とその応用に関する研究
霊長類研究所	景 山 節	附属人類進化モデル研究センター	霊長類の健康統御に関する生化学・分子生物学研究
〃	松 林 清 明	附属人類進化モデル研究センター	霊長類の生殖に関する生物学的研究
〃	中 村 伸	分子生理研究部門	サルモデルでのバイオメディカルゲノミクス
生態学研究所	藤 田 昇	生態学研究部門	植物と動物の相互作用に関する生態学的研究
地域研究統合情報 センター	田 中 耕 司	地域相関研究部門	熱帯農業、熱帯環境利用・生物資源利用の研究
国際交流 センター	大 東 祥 孝		1) 臨床精神医学 2) 臨床神経心理学(神経精神医学関連領域の症候論的・理論的研究)
産官学連携 センター	寺 西 豊		メディカルバイオ分野における知的財産管理並びに知的財産経営学に関する研究

(総務部)

平成22年度概算要求内示概要

新規要求

1. 医学部	医学科	学部学生	2人
2. 大学院法学研究科	法曹養成専攻(法科大学院)	専門職課程	△40人
3. 大学院理学研究科	数学・数理解析専攻 外	修士課程	△19人
4. 大学院医学研究科	社会健康医学系専攻	専門職課程	4人
5. 大学院薬学研究科	薬科学専攻 外	修士課程	△15人
6. 大学院工学研究科	社会基盤工学専攻 外	修士課程	222人
7. 経営管理教育部	経営管理専攻	専門職課程	15人
8. iPS細胞研究所(仮称)		教員5人分の人件費相当額	
9. 特別経費			

特別経費として新規20件、継続16件のプロジェクトおよび新規(更新を含む)2件の設備が採択された。

部 局 名	事 項(事 業)名	新規・継続・更新
【プロジェクト分】		
①国際的に卓越した教育研究拠点機能の充実		
薬学研究科	革新的ナノバイオ創薬研究の推進 －国立－私立大学間 薬－工連携プロジェクト－	継続
化学研究所	統合物質創製化学推進事業 －先導的合成の新学術基盤構築と次世代中核研究者の育成－	新規
再生医科学研究所	新たな臨床応用レベルのヒト ES 細胞株樹立のプロジェクト研究	新規
基礎物理学研究所	クォーク・ハドロン科学の理論研究の新たな展開を目指す国際共同研究プログラム	継続
経済研究所	先端政策分析連携推進機構の設置	継続
高等教育研究開発推進センター	大学教員教育研修のための相互研修型 F D 拠点形成	継続
iPS細胞研究所(仮称)	iPS細胞研究拠点形成事業 －iPS細胞の臨床応用に向けた取り組み－	新規
②高度な専門職業人の養成や専門教育機能の充実		
教育学研究科	子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究推進事業	継続
薬学研究科	横断的統合型教育による創薬・育薬力育成プログラム	新規
薬学研究科	薬学フロンティア教育プログラム開発	継続
工学研究科	「安寧の都市」を創る高度融合型人材教育ユニット支援事業－地域社会の協働と共に成長する教育ステージの実現－	新規
情報学研究科	知識社会におけるイノベーション人材養成のための全学共通情報教育プログラムの開発・実施	継続
④大学の特性を生かした多様な学術研究機能の充実		
医学研究科, 薬学研究科	ファーマコゲノミクスの確立に向けた先端的研究推進 －ゲノム, EBM, トランスレーショナルリサーチ, バイオインフォマティクス, ケミカルバイオロジーの融合プロジェクト－	新規
医学研究科	ゲノム医学を用いた地域疫学コホート事業 －大学と自治体の連携による21世紀型の新たな健康づくりの試み－	継続
生存圏研究所, 理学研究科	超高層大気長期変動の全球地上ネットワーク観測・研究	継続
防災研究所, 化学研究所, エネルギー理工学研究所, 生存圏研究所, 東南アジア研究所	生存基盤科学におけるサイト型機動研究の推進	継続
霊長類研究所	リサーチ・リソース・ステーション(RRS) －環境共存型飼育施設による新たな研究用霊長類創出プロジェクト－	継続
医学部附属病院 医学研究科	次世代医療技術・創薬・臨床開発プロジェクト	継続
フィールド科学教育研究センター	森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業	継続
こころの未来研究センター	こころ学創生に関する総合的研究事業	新規

部 局 名	事 項(事 業)名	新規・継続・更新
⑤産学連携機能の充実		
野生動物研究センター	絶滅危惧野生動物保全研究の推進プロジェクト	新規
【全国共同利用・共同実施分】		
化学研究所	化学関連分野の深化・連携を基軸とする先端・学際研究拠点形成	新規
人文科学研究所	人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点	新規
再生医科学研究所	再生医学・再生医療の先端融合的共同研究	継続
生存圏研究所	生存圏科学ミッションの全国・国際共同利用研究拠点形成	継続
防災研究所	自然災害に関する総合防災学の共同利用・共同研究推進事業	新規
基礎物理学研究所	基礎物理学の発展を目指す大学横断型全国共同研究	新規
ウイルス研究所	ウイルス感染症・生命科学先端融合的共同研究拠点事業	新規
経済研究所	先端経済理論の国際的共同研究拠点	新規
数理解析研究所	基礎数理共同研究の推進	新規
原子炉実験所	複合原子力科学の有効利用に向けた先導的研究の推進	新規
霊長類研究所	霊長類研究を基にした国際共同研究拠点の推進	新規
東南アジア研究所	東南アジア研究の国際共同研究拠点	新規
放射線生物研究センター	放射線生物学の研究推進拠点	新規
生態学研究センター	生態学・生物多様性科学における共同利用・共同研究拠点の形成	新規
地域研究統合情報センター	地域情報資源の共有化と相関型地域研究の推進	継続
【基盤的設備等整備分】		
(教育設備／研究設備)		
エネルギー理工学研究所	光エネルギー材料連携研究設備	更新
放射性同位元素総合センター	マルチモダリティ分子イメージングシステム	新規

(財務部)

部局の動き

宇治地区新年互礼会を開催

宇治地区では1月4日(月)、宇治おうばくプラザハイブリッドスペースで新年互礼会が開催された。宇治キャンパス各部局の連携促進と構成員の交流を深めることを目的に、仕事始めの日に行われており、今年で4回目となる。

まず、開会の辞として、宇治地区部局長会議世話部局長である尾形幸生エネルギー理工学研究所長から、耐震改修工事中での教育・研究活動と管理運営を行う構成員に激励の言葉があり、今後も積極的に各部局間の連携を深めるよう挨拶があった。

引き続いて、次期宇治地区部局長会議世話部局長となる化学研究所長の発声による乾杯の後、出席者が和やかに懇談し、会場では新年を迎えた実感と賑

やかな雰囲気の中で盛会のうちに閉会となった。



新年の挨拶を述べる尾形エネルギー理工学研究所長

(宇治地区事務部)

寸言

我が人生一還暦を迎えて一

河野 良雄



昨年の11月還暦を迎えた。私が京都大学の門をくぐったのは、今から約40年前の昭和43(1968)年4月のことです。四国・松山の片田舎から初めて故郷を離れて、北白川追分町(現在の農学部正門前)の下宿で4年間の京都生活がスタートしました。私達が在学した4年間は学生運動がはなやかなりし頃で、落着いて勉強したという記憶はありません。残念ながら卒業式もありませんでした。在学中には、東大安田講堂事件・よど号ハイジャック事件・浅間山荘事件等がありました。

昭和47(1972)年に現在の職場である農林中央金庫に就職し、今年でサラリーマン生活38年目になります。農林中金では、現場の農林水産業の実態を新人に肌で感じさせる為に、同期生の大半が全国の支店に配属されました。私が配属となったのは鹿児島支店で、沖縄がまだ本土に復帰していませんでしたので、最南端の出先でした。この初任地で支店で働く同僚の女子職員と結婚し、3人の子供をさずかりました。私は昨年の4月に農林中央金庫の第12代理事長に就任しました。農林中金は大正12(1923)年設立ですので、今年で創立87年目となります。これまでの11代の理事長は、全て農林水産省の事務次官経験者で、いわゆる天下りでした。私は初めての“はえぬき”・“プロパー”理事長とマスコミ等ではやじられていますが、私自身はそういった意識はまったくなく、これからも肩に力を入れず自然体で、故郷松山の気候のようにおだやかな気持ちでもって、トップとしての仕事をしていこうと考えています。

私が38年間サラリーマン生活をしてきて還暦を迎える年となり、組織のトップに立って振り返ってみますと、私達が過ごした時代において、日本社会ではその人物を評価する場合の基準が年齢層毎に異なっているのに気付きます。つまり20歳成人式を迎えるまでは、多分“記憶力”が一番のポイントになったのではないかと思います。ペーパー試験がよくできていい大学に入学した人達が社会的に認められる

からです。しかし20~40歳の間は“行動力”が人物評価の判断基準となり、40~60歳は“人間性・人柄”がポイントとなります。この基準が変わるからこそ人生もおもしろいのではないかと思います。それでは私達がさしかかっている60歳以降は何が基準になるんでしょう。私は“健康”ではないかと思います。健康で長生きすることが最も大切で、また人生の勝ち組に入る手段であると思います。私と同世代の皆さんは、これまで色々な人生を歩んで来られたものと思いますが、これからは健康で長生きすることによって、60歳迄の人生の全てを総括して帳尻があうようにしていただきたいと思います。私自身も思い出のサラリーマン初任地で出会った薩摩おごじょ(おごじょと呼ぶには気はずかしい50代半ばとなり、白髪まじりの頭に老眼鏡をかけて新聞を読んでいる私の妻)とともに、これからも健康で充実した日々を送りたいものだと思っています。

最後になりますが、現役京大生をはじめ後輩の皆様に期待することを申し上げます。日本は今、国も個人も歴史と時代の転換期に来ており、生まれ変わらねばならないと強く思っています。まず自分が変わって、周囲が変わって、国も変わっていくのです。ダーウィンの進化論に「強い生物や賢い生物ではなく変化しつづける生物だけが生き残れる」とあります。目下多くの国が必死になって変わり続けています。主要国の中で日本だけが変化を恐れてか根本的に変わろうとしません。少子高齢化と人口減を迎えている日本は、早急に21世紀の国家ビジョンを設計し、その中で憲法のあり方・社会保障制度・教育制度・国家財政の再建・人口減少対応策等の重要事項の方針を明示し、結果が平等ではなく、チャンスが平等で責任の伴う自由で活力のある国家に向けて、官民ともに奮い立つ時が来ていると思います。目下日本ではその為の人物、言いかえるとノーブレス・オブリージュ(位や地位の高い者は相応の責任と徳が伴うという意味)が少ないことが残念でなりません。後輩の皆様には、このノーブレス・オブリージュとして日本国の発展の為に活躍いただきたい。そうすれば日本の活路と未来は開けるものと確信しております。後輩の皆様の活躍を心より期待しております。

(この よしお 農林中央金庫理事長 昭和47年農学部卒業)

随想

大学院生命科学研究科設置に携わって

名誉教授 大山 莞爾

初代研究科長として随想の依頼があった。国内最初の生命科学研究科の設置について回想してみた。設置(平成11年4月)のかなり以前より、設置の必要性について参加を予想される研究科から先生方が話し合いに参加、当時農学研究科の佐々木隆造教授(現名誉教授)が委員として出ておられた。なにせ研究科をまたぐ学際的構想であったので、種々の問題について話し合いが十分なされたと聞く。平成9年度から小生が委員に加わった頃から、かなり具体的な事項に話が進んだ。理学研究科、農学研究科、医学研究科、薬学研究科、人間・環境学研究科、ウイルス研究所が参加する方向に決まったが、それぞれ研究科の事情があり、一時話し合いが止まっていた。



平成10年正月、当時の副学長古澤 巖先生に農学研究科から具体的に参加する研究分野(教授名)を伝えた。先生は、その場で決断され、設置準備委員会が発足した。平成11年度設置のためには、前年の6月の締切日には文科省に提出しなければならない。半年の準備期間しかなかった。当時の企画調整官藤井陽光氏、設置準備室長補佐江崎 淳氏(後に法学部事務長)、本部事務局の皆様には大変忙しくさせ、締切日近くには徹夜作業を強いることになった。研究科の理念、教授会等規則、カリキュラム作成と先生方も結構忙しかった記憶がある。研究科は統合生命科学、高次生命科学の2専攻から構成された。それぞれ既存の研究科より錚々たる教授陣(現在はその大半は定年退職)が集まり、国内初の大学院生命科学研究科が発足することになった。

先にも述べたように、学際的な研究科であるために解決すべき二つの問題があった。その一つは、学

部学生のいない大学院であることから、先生方の出身の学部との兼担・併任が要望されたが、それぞれ学部の事情により異なり、学部ごとに対応することになった。その二つ目は、研究棟の問題が残った。文科省のヒアリングの折、経理部長が早く実現するように前向きの発言があったように記憶する。とにかく、当時の経理部長、施設部長には多大なご尽力をいただいた。発足に伴い、研究科長を引き受けることになり、独自の研究棟を第1の目標とした。当時第3キャンパスの構想があり、木津地区(最近、農学部の高槻農場が移転すると聞いた)と桂地区が候補となっていた。生命科学研究科が木津地区にとの案もあがっていた。この話は結局、桂地区に工学研究科と情報学研究科の移転が決まり、生命科学研究科は本部地区に落ち着いた。生命科学研究科の先生方は、吉田キャンパスの各構内に分散して、とりあえずそれぞれ元の研究科でスタートした。生命科学研究科教授会は、事務局を理学部に置き開催、当時の理学部事務長が併任された。新しい建物は、まず医学部構内に先端科学研究棟として、第2棟は農学部構内に農学・生命科学研究棟として、第3棟は医学部構内に医学・生命科学総合研究棟として現在に至っている。生命科学研究科は現在、医学部構内と北部構内に分かれている。

私事になるが、昭和44年米国ロックフェラー大学に留学が決まり、京都大学入学時の総長平澤 興先生のご自宅へ報告にお邪魔した。激励のお言葉をいただけると期待していたが、ただ一言“俗な人間になるな”と言われた。今回、生命科学研究科に参加した先生方は皆俗な人間ではなかった。平澤先生が言われた意味が、これが“京都大学の学風”なのだと自分を納得させた。

(おおやま かんじ 平成15年退職 元生命科学研究科教授、専門は植物分子生物学)

洛書

かわいい子には旅をさせよ

河上 志貴子

京都大学には、現在100カ国籍に上る1,430人の留学生が在学している。十年前に比べこの数は約1.4倍に増えている。近年では「グローバル30」をはじめ、留学生受入増加、また、本学日本人学生の海外派遣の促進を目指した新しい取り組みが開始され、本学の「教育国際化」が著しく展開されつつある。国際交流センターにも、そうした新たな動きに今後いかに対応していくかを問われる時期が訪れている。



私は主に本学留学生の来日後における日本語・日本文化教育に携わる立場から、日々センターの活動に従事してきた。国際交流センターは、全学の留学生・外国人研究者を対象に約50科目の日本語授業を半期毎に開講している。また、国費留学生、KUINEP学部交換留学生、日本語・日本文化研修生等の来日に合わせて、それぞれのプログラム専用の日本語・日本文化授業を開講している。加えて、日本人学生・留学生の共学を一つの目的としている KUINEP 講義や「多文化間交流教育クラス」も提供している。

専門柄、私は講義で日本の古典を取り上げることが多いが、開講早々、ある歌を学生に紹介している。

あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に
いでし月かも

月を媒介にし、巧みに望郷の念と回想を絡ませた一首は、『古今集』『鞍馬歌』の巻頭を飾るほか、『土佐日記』等にも引用され、古来より親しまれてきた名歌である。作者は奈良時代の詩人阿倍仲麻呂と伝えられている。二十歳にも満たない若き仲麻呂は、716年に遣唐留学生に選ばれ、翌年に渡唐。本学二回生、KUINEP 留学生等とほぼ同じ年齢で海外留学を目指したことになる。仲麻呂は後に科举に合格し、以後、玄宗皇帝に重用されて唐朝に仕えた。李白、王維ら唐の文人とも親交が深かったという。733年、帰国を願い出たものの許されず、ようやく

許可を得た753年には、日本を離れてから三十五年もの歳月が流れていた。しかし、出発した一行は難航し、安南(ベトナム)に漂着した後、仲麻呂は再び唐に戻った。その後二度と祖国の土を踏むことなく、七十三歳で唐土にて生涯を閉じた。『古今集』の記述には、この歌は帰国を控えた仲麻呂のために、唐の人々が明州(浙江省)の海岸で送別会を開いた際に詠んだものと語り伝えられているとある。

仲麻呂が随行した遣唐使節団は、日本を立つ前に航路の無事を祈願して奈良の三笠山の麓で祭祀を行ったといわれる。仲麻呂が唐朝に仕えた時代は、万葉の歌人が活躍した時代であった。この頃の旅は常に危険と隣り合わせにあり、渡海する者は命がけの思いで、また家族との永遠の別れも覚悟の上で出発に臨んだ。これほどに危険に満ちた渡航にもかかわらず、なおも渡海を志した遣唐使や遣唐留学生。同様にリスクを背負って海を渡ってきた唐の使節や僧侶もいた。渡来僧鑑真を想起する方も多いことであろう。幸いに、21世紀の現在は、命の危険を伴うほどの海外留学というケースは稀である。また、渡航先の選択肢も多く、本学は、授業料を不徴収とする交流協定校だけでも、19カ国・地域における53の大学と締結している。しかし、海外へ留学する京大大学生は、総数182人に留まっている。これは本学の「教育国際化」の喫緊の課題と言わざるを得ない。

遣唐使等によって古代日本へもたらされた大陸文化の影響は計り知れない。本学に学ぶ留学生には、滞在期間を最大限生かし、多くの刺激を受けて新たにした日本への理解と知識を、世界各地に広げていくことを期待したい。と同時に、日本人学生には、五十年とまでは言わないが、半年、一年だけでも海外へ踏み出し、他国をしっかりと見てきて欲しい。望郷の念に浸り回想に耽る日々を送って欲しい。「他」と接して、「自」を見つめ直し、今一度「日本人」であることの意味を考える契機にしてもらいたい。と、あれこれ考えを巡らせながら、来期もまた、仲麻呂の話を学生にしようと思う今日この頃である。

(かわかみ しきこ 国際交流センター准教授、専門は古代日本文学)

栄誉

中西重忠名誉教授、深谷賢治理学研究科教授が日本学士院会員に選ばれる

このたび、中西重忠名誉教授、深谷賢治理学研究科教授が日本学士院会員に選ばれました。以下に両氏の略歴、業績等を紹介します。

中西重忠名誉教授は、昭和41年京都大学医学部を卒業、同46年本学大学院医学研究科博士課程を終え、米国国立衛生研究所客員研究員を経て、同49年京都大学医学部医化学教室助教授に採用、同56年京都大学医学部免疫研究施設第2部門(後の本学大学院医学研究科生体情報科学講座)教授に就任された。平成11年より本学生命科学研究科認知情報学講座教授も併任し、また、同12年から2年間本学医学研究科長、医学部長を務められた。平成17年3月に定年退職され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。本学退職後は、財団法人大阪バイオサイエンス研究所所長に就任し、研究を継続されている。

同名誉教授は、分子神経科学の研究を展開し、脳神経系の情報伝達と脳機能の発現の制御機構に関して、画期的な成果を挙げられた。同名誉教授は、種々の活性ペプチドの前駆体の構造と制御機構を明らかにし、さらに解析が困難であった受容体およびイオン・チャンネルの遺伝子の新しい単離法を開発し、



神経ペプチドおよび興奮性神経伝達物質グルタミン酸の受容体の遺伝子群とこれら受容体の脳機能における役割を明らかにされた。また、同名誉教授は、特定の神経回路の伝達機構を個体レベルで解析できる新しい手法を開発し、これらの先駆的研究によって記憶、学習や視覚、嗅覚系の情報伝達の基本的な機構を明らかにされた。同名誉教授の研究業績は、独自の手法の開発のもとに神経情報の基本原理を明らかにしたものであり、医学、生命科学の発展に大きく貢献するものである。

これら一連の研究に対して、同名誉教授にはこれまでに朝日賞、米国プリストル・マイヤーズ・スクイブ神経科学賞、慶應医学賞、恩賜賞・日本学士院賞、米国グルーバー神経科学賞ほか多数の賞が授与され、平成18年には文化功労者として顕彰されている。また、米国芸術・科学アカデミー外国名誉会員、米国科学アカデミー外国人会員に選出されている。今回の日本学士院会員への選出は、これまでの同名誉教授の一連の業績が評価されたものであり、誠に喜ばしい。

(大学院医学研究科)

深谷賢治教授は、昭和56年東京大学理学部を卒業し、同58年同大学院理学系研究科修士課程を修了後、東京大学理学部助手に採用、同教養学部、理学部助教授を経て、平成6年京都大学理学部教授に就任し、現在に至っている。



同教授の初期の研究は、「長さ」や「面積・体積」などが定まる空間、リーマン多様体に関わるものであり、リーマン多様体が退化する現象すなわち崩壊現象を研究された。山口孝男教授(現筑波大学)との共同研究である「基本群と曲率」への応用は、大域リーマン幾何学の基本定理の一つである。測度付き距離空間の収束概念は、崩壊現象とラプラス方程式の関係の研究から生まれた。

同教授は、次にゲージ理論の数学的研究を行い、1993年に2・3・4次元にまたがる位相的場の理論を、ある(A無限大)圏からの函手として定式化す

ることを提唱され、この圏は、後に深谷圏と呼ばれるようになった。

1994年にロシア人数学者コンセビッチは、深谷圏の定義を使い、ホモロジー的ミラー対称性予想を提唱し、ミラー対称性はシンプレクティック多様体の深谷圏と複素多様体の連接層の導来圏の対応であると予想した。この予想は、その後の研究の指導原理となった。

1996年には、従来複素解析関数あるいは多項式の範疇で考えられていた「特異点をもつ空間」の概念を、微分可能関数に広げる「倉西構造」とその多価摂動の概念を小野 薫教授(現北海道大学)と創始し、ハミルトン力学系の周期軌道についてのアーノルド予想に応用された。

深谷圏の最も一般的で数学的に厳密な定義は困難で、その後10年を超える研究を要したが、倉西構造、A無限大構造のホモロジー代数などに基づく、フレアーホモロジーや深谷圏の最も一般的な形での定義は、2009年にY.-G. Oh教授(現Wisconsin大学

Madison 校), 太田啓史教授(現名古屋大学), 小野 薫教授との共同研究で完成した。

これら一連の研究に対して, 同教授にはこれまでに朝日賞, 日本学士院賞, 井上学術賞, 日本数学会

春季賞などが授与されている。今回の日本学士院会員への選出は, これまでの同教授の一連の業績が評価されたものであり, 大変喜ばしい。

(大学院理学研究科)

話題

平成21年12月, 本学大学院生命科学研究科修士課程の吉川真由さんと東京工業大学大学院理工学研究科修士課程の関口 悠さんがノーベル賞授賞式に出席されました。吉川真由さんから, この貴重な経験について寄稿していただきましたので掲載します。

ノーベル賞授賞式に出席して

大学院生命科学研究科修士課程 1 回生 吉川 真由

2009年12月, 国際科学技術財団の支援のもと, 日本の学生代表としてスウェーデンのストックホルムで開催されたストックホルム国際青年科学セミナー(SIYSS)に参加させていただいた。本セミナーは青少年への科学振興を目的として, 毎年行われているプログラムであり, 今回は世界19カ国から25名の理系学生が派遣された。SIYSS への参加を通して何よりも自分の研究を楽しむことや, 年齢や国の枠を越えて科学を議論することの大切さを学んだ。

スウェーデンではノーベル賞授賞式が行われる12月10日の前後はノーベル週間と呼ばれ, ノーベル賞関連の行事で大変盛り上がる。SIYSS はそれに合わせて行われる約1週間のプログラムである。初日の12月5日はノーベル博物館に見学に行き, その夜には現地の学生コーディネーターによる文化紹介があり, 授賞式当日での晩餐会に向けたテーブルマナーも指導された。翌6日は医学生理学賞の選考を行うカロリンスカ研究所でノーベル賞の歴史や選考方法を教わり, 医学生理学賞の記者会見に出席した。7日には25名の参加学生が各自の研究を現地ス

トックホルムの高校生約400名に向けて発表した。8日にはノーベルレクチャーを聴講し, 9日に参加したレセプションでは受賞者の方々に直接質問できる機会が得られた。10日の授賞式には私たち日本人は振袖と羽織袴で参加し, その後の晩餐会とダンスパーティを満喫し, 帰国した。

多くの受賞者の方々が異口同音に実験を楽しむこと, そして議論を活発化させることの大切さを述べておられたのが印象的だった。どちらも研究を続ける上での基本姿勢であるが, 改めてその重要性を確認できた。情熱をもって研究をすることが素晴らしい結果に結びつく。その中で生まれる失敗や挫折から立ち直る際, 仲間と語り合うことが発想の転換に繋がり, 固定観念を取り払う柔軟性も生まれると教わった。ノーベルレクチャーを聴講しながら受賞者の方々の経歴を振り返ると, 科学はもはや1カ国ではなく, これからは国際的に発展させていくものであると感じた。英語での議論は当然であり, あらゆる文化背景の人々との議論が研究を活性化させるのだ。

各国の参加学生から学ぶことも尽きなかった。今回のSIYSS参加者のほとんどが私よりも年下であったが, セミナー発表の際, 学部生の時点で研究テーマをきちんと持っていることに感心させられた。さらに年齢という枠を取り外した議論ができる科学の世界に改めて感動した。参加者同士の文化交流においては, 人種差別やエイズ問題, 環境問題などにも議論が及び, 自身の研究と将来を考える上で大変有意義な経験となった。また, 今回のセミナーを企画してくださった現地学生コーディネーターは, 同年代にも関わらず, 学生自身で組織運営する力を持ち, 精神的に自立しており何度も感心させられた。



授賞式会場での吉川さんと関口さん

このような素晴らしい人々との出会いがあった SIYSS 中には、内省する機会が多々あり自分自身の未熟さに落ち込んだ瞬間も少なくなかった。しかし狭い世界に居ては気づけなかった自身の研究生活の改善点を発見し、世界の研究者や参加学生のエネルギーに触れ、視野が広がった。また、これから自分はどのような研究をし、どのように社会に役立て

ていけるかというビジョンをたてる良い契機になった。これからも純粋に、誠実に研究を行いたいと思う。

現地学生コーディネーターの皆様、国際科学技術財団の皆様、京都大学留学生課の皆様をはじめ、私にこのような機会を与えてくださった皆様に心より感謝している。



2009年 SIYSS 参加学生と現地コーディネーター

松本 紘総長が第5回京都大学東南アジアフォーラムに出席

松本 紘総長は、1月7日と8日にバンドン工科大学で開催された第5回京都大学東南アジアフォーラム「地球と宇宙科学」に出席された。京都大学からは、他に水野廣祐教授(東南アジア研究所長)、川井秀一教授(生存圏研究所長・遠隔会議システムによる参加)、ジェームズ・モリ教授(防災研究所)、山本博之准教授(地域研究統合情報センター)、岡本正明准教授(東南アジア研究所)、木村周平特定助教(同)など関係教職員が出席した。

インドネシアの京都大学同窓会(HAKU)が中心となって開催する本フォーラムは、インドネシアではジャカルタ(2007年)、ボゴール(2008年)について3回目となり、本学とバンドン工科大学が共催で開催した。今回のフォーラム参加者は、登録者だけで120名を超え、実際の参加者は150名以上の大盛況であった。

松本総長は、開会において、



松本総長と Santoso バンドン工科大学長

現在の地球環境を考えれば Sustainability よりも Survivability が重要だとする趣旨のスピーチを行われた。その内容は、参加者にとって既存の思考的枠組みに再考を迫る重要な方向を示唆するものとなった。

7日には HAKU による夕食会が開かれ、バンドン工科大学の日本文化部の学生が日本の盆踊りを披露し、松本総長をはじめ参加教員も歓迎の踊りの輪に加わるなど和やかな空気の中閉会した。



バンドン工科大学日本文化部の学生と交流する松本総長

(国際部)

第1回京大病院 iPS 細胞・再生医学研究会を開催

1月15日(金)に医学部附属病院は、第1回京大病院 iPS 細胞・再生医学研究会を芝蘭会館にて開催した。同研究会は、当院における iPS 細胞、ES 細胞、体性幹細胞等を用いた再生医学研究の向上並びに成果の普及を図り、ひいては医療の発展に貢献することを目的として平成21年11月に設置されたものである。第1回目となる今回の研究会では、iPS 細胞研究センターの高橋和利特定拠点講師等による講演が行われ、学内外から180名余りの参加があった。

研究会では、中村孝志病院長から開会



開会の挨拶を行う中村病院長
(産経新聞提供)

挨拶の後、青山朋樹准教授(医学研究科人間健康科学系専攻)より「骨髄間葉系幹細胞を用いた骨壊死の治療」について、井上治久特定拠点准教授(iPS 細胞研究センター)より「iPS 細胞作製技術を用いた筋萎縮性側索硬化症の研究」について、中尾一和教授(京大病院内分泌・代謝内科)より「生活習慣病領域の iPS・ES 細胞研究」について、平家俊男准教授(京大病院小児科)より「京大病院でのヒト疾患特異的 iPS 細胞作成、利用における臨床研究手続き」について一般講演が行われた。

引き続き、高橋和利特定拠点講師より「iPS 細胞の安全性向上を目指して」と題した特別講演が行われた。

最後に、三嶋理晃副病院長より閉会挨拶が行われ、研究会は終了した。

(医学部附属病院)

経営管理大学院が神戸大学および慶應義塾大学のビジネススクールと連携

経営管理大学院(院長 成生達彦)は、神戸大学大学院経営学研究科(研究科長 加登 豊)および慶應義塾大学大学院経営管理研究科(委員長 河野宏和)と包括的な連携を行い、優れた人材を輩出する教育システムを共同開発することに合意し、1月18日、神戸大学で基本合意書に調印した。

また、調印式に先立ち、MBA シンポジウム「わが国における経営人材育成の最前線」が行われた。

本合意書に基づき、ケーススタディを重視する慶應義塾大学、研究重視型の神戸大学、文理融合型の本学が、それぞれの特色を生かして、経営に携わる

優秀な人材の育成を目指すこととしている。



調印式の様子

(経営管理大学院)

マラヤ大学にて海外拠点オープニングセレモニーを開催

1月20日、マラヤ大学にて「グローバル COE プログラム『アジア・メガシティの人間安全保障工学拠点(GCOE-HSE)』、科学技術振興調整費『環境マネジメント人材育成国際拠点(EML)』マラヤ大学海外拠点オープニングセレモニー」が開催された。

本セレモニーでは、Mohd Jamil Maah マラヤ大学副学長補佐から開会の辞が述べられるとともに、大寫幸一郎工学研究科長から京都大学とマラヤ大学との間におけるこれまでの交流、さらに本拠点に対する今後の期待が述べられた。また、Ghauth Jasmon マラヤ大学副学長からは、大学間競争の中での本拠点の意義が述べられた。さらに、堀江正彦駐マレーシア日本国特命全権大使は、バハサ(マレーシア公用語)を流暢に使用されながら、本プログラムへの期待を述べられた。次いで、覚書の交換、堀江大使によるプレートへの署名、記念品の交換、写真撮影が順次行われた。その後、GCOE-HSE プログラムリーダー松岡 譲教授が、本プログラムが目指す目標と人間安全保障工学がアジアにおいて果たす役割について述べ、また、EML プログラムリーダー藤井滋穂教授が、これまでのマラヤ大学との間における e-learning についての活動を報告するとともに、「環境マネジメント人材育成国際拠点(EML)」のプログラムの概要を説明した。

本セレモニー終了後、記者会見が行われ、マラヤ大学との間における留学生の交流などについての質疑応答がなされた。引き続き、主要関係者によるオフィス見学が行われ、盛会のうちに終了した。

本セレモニーでは、約100名の関係者が一堂に会し、これまでの京都大学とマラヤ大学との友好関係が非常に高いものであることを示した。また、GCOE-HSE プログラムおよび EML プログラムに対する関心も高く、今後、クアラルンプール拠点(マラヤ大学)



オープニングセレモニー関係者集合写真

の発展が大いに期待される。

また、本セレモニーに先立ち、大寫研究科長一行は、1月19日、在マレーシア日本大使館に堀江大使を表敬訪問した。

表敬訪問には大寫研究科長のほか、松岡教授、清水芳久教授、長 昌史講師および事務職員が同行し、大使館側は堀江大使のほか、深堀直人一等書記官も一行を歓迎された。

懇談では拠点大学交流事業や21世紀 COE, GCOE, G30等、京都大学での教育、研究面における国際的事業とともに、日本とマレーシアの教育面における協力状況の話題などが中心となり、終始和やかな雰囲気で行われた。



大寫研究科長一行と堀江大使(左から3人目)

(大学院工学研究科)

JSPS-VCC コーディネーター会議を開催

工学研究科で実施している日本学術振興会拠点大学交流事業「環境科学」(交流先：マレーシア)に関連し、1月20日にクアラルンプール市内のホテルでコーディネーター会議が開催された。



会議の様子

会議には、京都大学側から実施組織代表者である大畠幸一郎工学研究科長をはじめ、コーディネーターの松岡 譲教授、清水芳久教授、藤井滋穂地球環境学堂教授、プログラムリーダーの長 昌史講師および事務職員3名が出席、マラヤ大学側からはコーディネーターの Mohd Jamil Maah 副学長補佐、プログラムリーダーの Nik Meriam Nik Sulaiman 教授、Nor Zaherah Mohd Yusof 事務官および Jamiah Mohamad 秘書が出席された。本事業は、平成12年度から始まった10年間の事業であり、平成21年度末

を以て終了するため、今回が本事業最後のコーディネーター会議となる。

会議の冒頭で大畠研究科長から挨拶があり、本事業におけるマレーシア側の協力に対する謝辞が述べられた。また、Mohd Jamil Maah 副学長補佐からは、これまでの協力に対する感謝の意とクアラルンプール来訪に対する歓迎の意が述べられた。会議では、今年度の交流状況についての報告および今後の計画について、活発な議論が交わされた。

マラヤ大学と工学研究科は、25年以上に及ぶ交流の実績があり、両者は今後もこれまでの関係を維持・強化していくことで一致した。



会議出席者集合写真

(大学院工学研究科)

ソウル大学校代表団が桂キャンパスを訪問

1月25日、姜泰晋(カン・テジン)工学部長を代表とするソウル大学校の代表団(学部長5名、教授2名)が桂キャンパスを訪問された。

まず一行は、Bクラスターにて、大畠幸一郎工学研究科長、小森 悟副研究科長、樫木哲夫教授、長 昌史講師、金善玖講師に迎えられ、桂キャンパスの来歴や工学研究科の概要について説明を受けられた。その後、インテックセンターへ移動し、小森副研究科長から水槽実験装置についての説明を受け、デモ実験を見学された。

Cクラスターでは、杉浦邦征教授からグローバル30プログラムの説明、松島格也准教授等から経営管理大学院と工学研究科の関わりおよび教育制度の説明、また、鄭蝦榮研究員からは GCOE-HSE プログラムの説明を受け、活発な意見交換が行われた。

Aクラスターでは、野田 進教授による GCOE-PESEC プログラムの説明を受けた後、野田研究室、

川上研究室および江口研究室を次々と見学された。

最後に、船井哲良記念講堂内のノーベル賞およびフィールズ賞受賞者の展示コーナーを視察され、若き日の研究ノートに興味深くご覧になった。

およそ3時間半に及ぶ訪問の間、一行は精力的にスケジュールをこなし、帰路につかれた。



ソウル大学校代表団との集合写真

(大学院工学研究科)

訃報

このたび、岩垣雄一^{いわがきゆういち}名誉教授、寺田 孚^{てらだ まこと}名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に両名誉教授の略歴、業績等を紹介いたします。

岩垣 雄一 名誉教授



岩垣雄一先生は、平成21年12月26日逝去された。享年86。

先生は、昭和21年9月京都帝国大学工学部応用物理学科を卒業され、同23年4月同大学大学院を退学、同年9月京

都大学工学部土木工学教室雇を命ぜられ、その後工学部助手、講師、助教授に昇任し、同31年6月同大学防災研究所に配置換、さらに米国コロラド州立大学に留学の後、同35年4月防災研究所教授に昇任、水文学部門さらに海岸災害部門を担当された。昭和43年8月工学部に配置換となり、土木工学科海岸工学講座を担当、同62年3月停年退官し、京都大学名誉教授の称号を授与された。退官後は名城大学理工学部教授に就任し、平成3年より理工学部長、同6

年より総合研究所長を務めた後、同8年3月定年退職し、同大学名誉教授の称号を授与された。

この間、水理学および海岸工学の分野で多岐にわたる研究活動を行い、流体力学的手法による水理学の近代化と、創成期の海岸工学の進歩発展に多大な貢献をされた。学外にあっては土木学会海岸工学委員長を務めるとともに、通商産業省、建設省、運輸省、本州四国連絡橋公団、各地方自治体等の多数の技術専門委員会の委員長を歴任された。

平成元年には運輸大臣より交通文化賞を受賞、同2年内閣総理大臣より国際防災の10年記念功労者表彰を受けられ、同13年には勲三等旭日中綬章を受章された。

(大学院工学研究科)

寺田 孚 名誉教授



寺田 孚先生は、1月3日逝去された。享年81。

先生は、昭和27年3月京都大学工学部鉱山学科を卒業後、京都大学大学院研究奨学生を経て、同28年7月京都大学工

学部助手に採用された。昭和42年5月に講師、同43年6月に助教授、同57年4月に教授に昇任され、工学部資源工学科開発工学講座を担当された。平成4年3月に停年により京都大学を退官され、名誉教授の称号を授与された。本学退官後直ちに名城大学工学部新設準備室教授に着任され、平成7年4月同大学

都市情報学部設立と同時に同学部教授、初代学部長に就任された。平成13年3月定年により同大学を退職され、名誉教授の称号を授与された。

先生は、資源開発や地下開発に係わる岩盤力学に関する基礎とその応用技術の開発、鉱山から排出される坑水制御に関して多くの業績をあげられ、日本鉱業会と日本材料学会より論文賞を授与された。また、日本学術会議力学研究連絡委員会、文部省国際局学術審議会、通商産業省立地公害局中央鉱山保安協議会等の委員を務められ、学術行政および資源行政にも尽力された。

(大学院工学研究科)

グローバル COE プログラム紹介

今月号から、グローバル COE プログラムの紹介をシリーズとして掲載します。

グローバル COE プログラムとは、我が国の大学院の教育研究機能を一層充実・強化し、国際的に卓越した研究基盤の下で世界をリードする創造的な人材育成を図るため、国際的に卓越した教育研究拠点の形成を重点的に支援し、もって、国際競争力のある大学づくりを推進することを目的とする事業です。



プログラム名称：生物の多様性と進化研究のための拠点形成ーゲノムから生態系までー

拠点リーダー：理学研究科教授 阿形 清和

申請分野：生命科学 **研究分野：**基礎生物学

申請部局：理学研究科，霊長類研究所，生態学研究センター，野生動物研究センター

本拠点は、理学研究科の生物科学専攻の3教室（動物学教室・植物学教室・生物物理学教室）と生態学研究センター・霊長類研究所・野生動物研究センターとの4拠点の連携からなる平成19年度スタートのプログラムである。多岐の研究分野にわたる生物学者を一堂に集めて、生物の多様性・進化研究を推進する、京大ならではのプロジェクトチームが形成されている。ここでは、プログラムの趣旨と3年間の進捗状況について簡単に紹介したい。

私が京都大学に入った1970年代は、博物学的色彩の強かった生物学が新たなサイエンスとしての地位を固めている時代だった。そして、分子生物学の台頭によって、生物学は確固たる実験科学としての地位を築くことになる。その過程において、実験科学として成立した生物学を過去の博物学的色彩の強い生物学に戻さないように、意図的あるいは無意識的に階層横断的な教育を禁じてきたのが実情である。

私の専門分野である発生学を例にみてみよう。発生学は、ダーウィン以降に起きた生物の系統関係を明らかにするために生まれた学問分野である。すなわち、成体の形態ではなく、発生初期胚の形態にもとづいて動物の系統関係を調べるーことから発生学は始まった（比較形態発生学と呼ばれる）。ヘッケルの『個体発生は系統発生を繰り返す』を代表例として次々と魅惑的な仮説が提唱された。し

かし、どれも実験的に証明することは不可能であり、仮説以上に進展することはなかった。この博物学的生物学から脱却するために20世紀初頭に始まったのが、胚を2つに分けたり、胚の移植実験を行って発生メカニズムをめざす実験発生学である。実験発生学者は比較形態発生学と意図的な決別をし、分子生物学や遺伝学との融合により、発生を遺伝子プログラムとして理解できる時代や、そのプログラムをリセットするiPSの時代をもたらしたのである。その間、発生学をめざす若者は、いろいろな胚を扱う比較形態学ではなく、モデル生物を使った発生遺伝学を主に学ぶことになる。

しかし、この決別したはずの2つの潮流が、ゲノム時代の到来とともに、100年のブランクを乗り越えて融和を始めたのである。発生遺伝子プログラムの進化系統にそった解説が始まり、EvoDevoという新たな学問分野が確立された。比較ゲノムと遺伝子操作によって、生物の進化を



植物園内のゲノム解析室でのゲノム科学実習風景

ゲノムの進化として実験的に証明する時代へと突入した。比較形態発生学を理解した上で、モデル生物で培われたゲノム科学を遂行できる研究者が21世紀の生物学者となったのである。

このようなゲノム時代への突入によってもたらされる変化は、発生学に限ったことではなく、生物学の全ての分野にみられる。特に、次世代シーケンサーの登場によって(昔は全世界の共同作業として何年もかかっていたヒトのゲノム解読が1研究室で短期間でできるようになった)、加速度的に生物学は新たな次元へと突き進もうとしている。生態系の変化もメタゲノムといって、水中に棲んでいる生物のゲノムをまとめて読んでしまっ、生物集団の変化を定量化してしまうことが行われている。このような新しい学問潮流に対応するためには、従来禁じられてきた階層横断的な教育プログラムを<ゲノムをキーワード>に再編成する必要がある。そこで、われわれのグローバル COE では、「ゲノムからフィールドまで」をキャッチコピーに、多様な生物が棲むフィールドをベースにミクロレベルでの解析もできる新たな教育プログラムを構築している。

代表的なカリキュラムとして、屋久島フィールドワーク・トレーニングコースとそれに続くゲノム科学実習がある。25名ほどの大学院生をチャーターバスに押し込み、屋久島まで送り込んで、生物多様性の現場でフィールドワークのノウハウを教えるとともに、大学に帰ってきてからフィールドで採取してきたサンプルから DNA を精製してシーケンスするトレーニングを徹底して行っている。京大が40年間にわたって観察し続けている屋久ザルの行動と社会性(全ての個体が識別されている!!)について、キノコ食から考察するというテーマを設定し、今までに屋久島で採取した1,000近いキノコの DNA 配列をデータベース化し



屋久島フィールドワーク・トレーニングコース

ている(約13%が毒キノコだった!!)。その一方で、フィールドで集めたサル糞から DNA を精製してキノコ由来の DNA を増幅・シーケンスし、どのサルがどのキノコを食べていたかを解析して、屋久島のサルたちがどのようにして毒キノコを見分け、どのようにして子ザルにその見分け方を伝授しているのかを考察することにチャレンジしている。

また、動物学教室が55年間にわたり暗黒条件下で継代飼育しているショウジョウバエ(すでに1,400世代近く暗黒下でのみ継代されており、暗黒ショウジョウバエと呼ばれている)の全ゲノム配列決定を行い(遺伝研との共同研究)、次世代シーケンサーから出てきた生データからどのようにして変異している DNA を探し出すのか—さらに変異のみつかった遺伝子と暗黒に適応した形質との対応をどのような実験を組み立てて解析するのか—といった最先端のゲノム演習プログラムも大学院生達に提供している。このような階層横断的なトレーニングを通して、新たな発想のサイエンス、刺激的なサイエンスを展開できる京大生が育ってくれることを期待している。

さらに、若手の英語のトレーニングについても、エリザベスさんというミクロ系もマクロ系の生物学も理解できる PhD の方を得たこと、生命科学系キャリアパス形成ユニットのスタッフとの連携が得られたことによって、かなり充実した新規カリキュラムを立ち上げることができた。順調に学生の国際化の推進に成功している。今年の屋久島フィールドワーク・トレーニングコースではドイツの海洋 COE グループとジョイントで行う予定である。

本プログラムを開始して3年目になって、やっと次世代シーケンサーの購入支援が京大から得られた。いよいよ次世代シーケンサーを使ったゲノム解析を開始するとともに、次世代シーケンサーを使った演習も本格化する。今回の支援によって、残り2年で多くの驚きを生むような成果が得られるものと期待している。中間評価において、総長指導による中央からの継続的な支援が求められた。今後とも中央との連携を強めながら、京大の看板分野のひとつである生物研究と教育を推進していきたいと考えている。

(理学研究科教授 阿形 清和)